

ECM成熟度モデル

			Level 1 管理の不在	Level 2 初期レベルの管理	Level 3 形式的な管理	Level 4 実践的な管理	Level 5 先験的な管理
			公式なコンテンツ管理の取り組みが存在しない。分散したファイルサーバやローカルハードディスクが文書の保管場所とされているため、データの重複や散逸、再作業などの問題が発生している。	一部のコンテンツに対して管理プロジェクトが実施され、文書管理やコラボレーションなどが単独導入されている。利用度や有効性の面で課題がある。	コンテンツの棚卸が実施され、計画、ポリシー、手続へと反映されている。しかし、システムへの反映まではまだ時間がかかる。複数のプロジェクトが実行されているが全体の戦略に基づいた調整はなされていない。ライフサイクル管理導入の初期段階にある。	コンテンツが組織全体にわたって統一的に管理されている。重要な電子データに関してはすべて有効期限管理がなされている。管理が不要であるコンテンツも明示的に識別されている。ソーシャル/コラボレーションのスペースが提供されている。	コンテンツ管理機能が共有サービスとしてSOAの取り組みの中に統合されている。DAMなどの新しいコンテンツ管理技術の導入の際にもプラグインによる対応が可能である。情報管理についての十分な理解が共有されており新サービスの導入も適宜可能である。
人	IT技能	既存あるいは新規のシステムの能力を引き出すスキル	フォーマルなりポジトリやワークフローシステムを管理した経験がない。	ECM関連システムの「初期導入」を行ったことがある。	ビジネス上重要な文書にフォーカスしたシステムを2バージョン以上にわたって実装した経験がある。	リポジトリやワークフローシステムの管理がコアなITスキルであると見なされている。	最新のコンテンツテクノロジーに対し自発的に学習・評価を行っている。
	ビジネス技能	ECMのコンセプトに対する従業員や経営者の理解の度合い	ECMの価値や役割についての理解がない。	情報の管理が欠如しているという問題意識が共有されつつある。	キーとなるステークホルダを巻き込んでECMの必要性についての議論が行われる。	経営者によるECMの積極的な関与が実際に行われ、プロセスとコンテンツについての分析スキルの必要性が十分に認識されている。	コンテンツ管理に係わるスキルや貢献が人事精度上の評価対象として定義づけられている。
	プロセス	コンテンツ指向ビジネスプロセスについての分析の範囲	コンテンツを標準化するための手続がほとんど定められていない。	統一性や明確なポリシーが欠如した場合たりのワークフローが散見される。	プロセス自動化の前段階として、部門横断的なプロセスのモデリングが行われたことがある。	複数のシステムあるいは部門にわたるプロセスの自動化が実現している。	例外処理を含む頑健な自動化基盤の構築とシミュレーション機能の活用実態がある。
	協調	ITとビジネスの協調の実現水準	キーとなるビジネスドライバをIT企画瀬錦紗が理解していないためITポートフォリオ上ECMに関するギャップが発生している。	技術とコアとなるビジネスプロセスの間のギャップが解消されていない。ITのメトリクスがビジネス面の成果によって評価されていない。	IT側とビジネス側の双方が情報管理上の自らの役割を理解しており、戦略上の不整合を起こさないようになっている。	IT側とビジネス側が戦略の実行段階においても密接に協調している。しかし、同時に協同で作業をするというよりは相手の成果を待ち交互に作業をすることが多い。	戦略の立案時点からITとビジネスが協同作業を行っており、その実態を適切なメトリクスに従って頻繁にチェックしている。
情報	コンテンツと属性	コンテンツと属性に対する分析の範囲	公式な文書の目録や分類方法が存在しない。	部門単位でのコンテンツの棚卸が実施されている。タグ付けの試みの初期段階が実施済みである。	組織全体規模でのコンテンツの棚卸が実行中である。統制語彙の導入が初期段階にある。	新しいリポジトリとコンテンツの類型が登録され、全体的なタキソノミが整備されている。	フォークソノミの仕組みが実装されている。属性値のレビューが自動化されている。
	深度	コンテンツライフサイクルの整備の度合い	ライフサイクル管理（コンテンツのステータス管理）が行われていない。	多くのコンテンツは場当たり的に保管されている。幾つかの部門では記録管理の導入を始めている。	電子的コンテンツに関して記録管理と有効期限管理が実装されている。	組織全体の規模で電子的コンテンツと紙文書を統合した記録管理が実現している。	すべてのコンテンツがライフサイクル管理の対象となっている。
	ガバナンス	情報管理についてのポリシーと手続の整備の度合い	コンテンツ管理に関するポリシーや手続が存在しない。	部分的なポリシーや手続が存在しているが統一的な取り組みは存在しない。	コンテンツに関する統制のための枠組みや手続の文書化が実行されている。	ポリシーと手続が周知徹底され全社規模で共有されている。	レビューと定常業務として取り込まれ、顧客の声がフードバックプロセスに反映されている。
	再利用	コンテンツ再利用の実現範囲	定常的に重複コンテンツが作成されている。	まだ重複コンテンツが作られ続けている。	コンテンツに対する初期の分析が行われ整理がされている。	システムやチャネルを横断して文書の目的の再定義が実施されている。	コンテンツ部品もシステムとチャネルを横断して再利用される環境が整っている。
	発見性	適時に適切なコンテンツへアクセスできる機能	各ユーザがクライアント毎に検索を実行するため、無駄に時間がかかってしまう。	検索インデックスが調整され基本的な属性情報が管理されている。	検索技術の目的が再定義され、検索のログや統制語彙を使ったチューニングが実行されている。	組織横断の検索アプリケーションが実装されている。	検索と自動分類がコアサービスとして提供されている。
システム	スコープ	DM、BPM、DAMなどのECM機能の適用範囲	基本となるコンテンツの類型も識別されていない。	簡易的なワークフローを含む文書管理アプリケーションが実装されている。	DAMやBPMのパイロットプロジェクトが実行されている。基本となるコンテンツ類型とロケールが識別されている。	ビジネス上の重要性により適用対象となる情報システムが優先順位付けされている。	様々な管理システムに適用できる環境が整えられている。
	カバー範囲	部門単位から組織全体に向けたシステム範囲の拡張度合い	対象となるシステムが存在しない。	部門毎バラバラに検討をしている。	部門横断のシステム連携が試みられ始めている。	部門単位での成功事例が組織全体規模へとスケールされている。	組織単位のイノベーションを全社的に取り込んでいくことが奨励されている。
	セキュリティ	組織権限に応じたコンテンツへのアクセス手段の実現度合い	セキュリティ体制が存在しない。	システム毎に別個に検討・対応している。	複数のセキュリティソリューションの間にある不整合や過不足が公式に認識されている。	ポリシーや手続きが標準化されている。	セキュリティも統合された中央集権的な共有サービスの一部に組み込まれている
	ユーザビリティ	アプリケーションの目的性	システムが不足しており、ユーザビリティが阻害されている。	エンドユーザへの普及の度合いが計測されているが、不満点の分析はなされていない。	シナリオ分析やベルソナ方によるガイドの設計などの試みが導入されている。	ユーザ中心のデザインがどのシステムに対しても導入され、公式にフィードバックも取り込んでいる。	すべてのシステムアクティビティに共通した評価指標としてユーザビリティの視点が組み込まれている。